

古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第125号



出雲大社
[島根県出雲市大社町]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

表紙 ● 古文化にロマンを求めて

出雲大社

[鳥根県出雲市大社町杵築東]

創建の由緒

創建の伝承は神話にまで遡ります。出雲大社の御祭神の大国主大神様は、神代の昔、人々のために国づくりに汗を流され、国土を開拓されて、農耕・漁撈など山野河海の生業、医薬禁厭の法などをお授けになられ、人々の日々の暮らしのすみずみに至るまで幸せの種蒔きをなされ、礎を成しととのえ結ばれました。そして、国づくりなされた国土を御皇室の御祖先の天照大御神様に「国譲り(国土奉還)」なされ、神事の世界、幽世という目に見えない世界、神々の世界、魂の世界をお治めになられる大神として、壮大な御神殿にお鎮まりになりました。

その御神殿は、広く厚い板を用いて御造営なされ、長く長い御柱は地下の岩盤に届くほどに地中深く突き固められ、御屋根に掲げられる千木はたなびく雲を貫くほどと、その壮大な様が『古事記』(712)・『日本書紀』(720)に言い継ぎ語り継がれています。

また、『出雲国風土記』(733)には、祖神の八束水臣津野命が「国引き」をなさって国形を造られた後、国づくりをなされた大国主大神様を「天の下造らしし大神」と称えて大神様のお住まいを多くの神々が集われて築かれました。それゆえに、この地域をキヅキ(杵築)と言うと、地名起源に御神殿の御造営を語っています。また別に、壮大な御神殿ゆえに、長い長い測りをもって御造営されたことなどが記されています。



出雲神話の世界「大国主大神様の国づくり」/吉田暢生『農耕の図』

社殿の変遷

平安時代に子供の教科書であった『口遊』(970)には、「雲太・和二・京三」と記されています。「雲太」とは「出雲太郎」の略で、出雲大社が一番、「和二」とは「大和二郎」の略で、大和の東大寺大仏殿が二番、「京三」とは「京三郎」の略で、京都の大極殿が三番目に大きいことを語っています。

当時、東大寺大仏殿は高さ15丈(約45メートル)であったと言われており、古代出雲大社の御本殿は高さ16丈(約48メートル)を誇る高大なものであったと伝えています。その御神殿の平面図『金輪御造営差図』は千家国造家に伝蔵され、この時代の御造営を「金輪の御造営」と言い伝えています。また、御造営に関わる古文書記録には、出雲大社の御本殿をして「天下無双の大廈」と称



えています。高大な御神殿は、それゆえに幾度となく顛倒しました。古代の文献記録にはしばしば「社殿顛倒」のことが記されています。しかし、「おかげ」に結ばれる人々は、倒れても倒れてもなお大国主大神様のお住まいをと御造営を継ぎ伝えました。

平安時代の出雲大社本殿復元模型

古代の御本殿柱

平成12年(2000)に出雲大社境内において、過去の御本殿の柱が発掘され、これまで言い継ぎ語り継がれた「3本束ね柱」の御柱9本をもって御造営された「金輪御造営差図」御神殿の実在を明らかにしました。



出土した柱材

その後の科学的な調査の結果、発掘された柱は鎌倉時代の宝治2年(1248)に造営されたものと推定されています。

本殿(国宝)

出雲大社は平成25年(2013)におよそ60年ぶりの正遷宮を迎え、約5年かけての御修造となった御本殿に大国主大神様はお戻りになられました。御本殿の高さは8丈(約24メートル)にも及び、「大社造り」と呼ばれる日本最古の神社建築様式を今に伝えています。切り妻、妻入りの構造で、平面は9本の柱が田の字型に配置された正方形の間取りです。檜皮葺の屋根の上には2組の巨大な千木が交差しています。

現在の建物は江戸時代・延享元年(1744)に再建されたもので、以来、文化6年(1809)、明治14年(1881)、昭和28年(1953)と3度の御遷宮御造営(屋根の葺き替えなどを主とする御修理)をお仕えされ、現在に至っています。



平成の大遷宮

令和2年度 檜皮採取者(原皮師) 中級研修 終わる

檜皮採取者(原皮師)の技術力向上の為、今年度も全国の国有林、市有林に入山し、12クールの研修を行いました。9月14日の賤母国有林を皮切りに、12月18日妙法山国有林での研修を最後に全日程を無事終了しました。研修に参加した中級研修生22名は、2～3クール

お互いを高め合いながら技術の向上に取り組みました。

最後になりましたが、研修林をご提供くださった国有林関係者の皆様をはじめ、採取事業に関わった全ての皆様に、深く感謝申し上げます。



京都市有林



京都市有林

令和2年度 檜皮採取技術査定会

新型コロナウイルス感染症の感染拡大、兵庫県、京都府、大阪府に緊急事態宣言が発出、延長の為、1月18日～19日から2月25日～26日に延期していた檜皮採取技術査定会を中止しました。研修生にとって年に一度の技術を披露する場がなくなることは、大変残念に思います。気持ちを切り替え、技術向上に取り組み、来年の査定会で、

力を存分に発揮してください。

最後になりましたが、兵庫森林管理署、増位山国有林関係者の皆様、査定会に関わる全ての皆様の日程変更など迅速な対応、深く感謝申し上げます。

檜皮採取者（原皮師）養成研修事業を振り返って

国有林入山20年

平成13年に中部森林管理局木曾森林管理署南木曾支署、近畿中国森林管理局との檜皮販売の協定を締結、本格的な国有林への入山が始まりました。

当時、保存会が重点的に取り組んでいた檜皮資材の確保をめぐる様々な問題のひとつとして、原皮師の後継者不足がありました。平成11年度より檜皮採取者(原皮師)養成研修を開始。養成研修を行うには、優れた技術を持つ指導者、意欲的な研修生、そして檜皮採取林の確保が必要不可欠です。幸いにも保存会には、熟練の技を持つ指導者がおり、若い意欲的な職人が少しずつ増えてきていました。

しかしながら、檜皮採取林の確保が大きな問題でした。毎年4人の研修生を10クール(1クール2週間)の期間で養成するとして、年間10クール分の採取林が必要で

あり、10年に一度の檜皮採取のサイクルを考えると100クール分の採取林が必要になります。現実的に段取りが難しい数字でしたが、国有林を檜皮採取林としてご提供いただき、保存会にとっては大変ありがたいことでした。そして新規の採取林は、研修場所の確保だけでなく、檜皮資材の確保にも繋がりました。

今こうして、国有林にて黒皮を採取できているのも、文化庁、森林管理署、全国の文化財関係者の皆様のご支援ご指導をいただきながら、保存会の諸先輩方が積極的に活動してこられたからだと思います。

世界に誇れる檜皮茸の根本となる技術である檜皮採取者(原皮師)養成研修事業を今一度振り返り、初心を忘れることなく今後とも向上心を持って取り組んでいきたいと思っています。



平成17年度／査定会(広島県・御調八幡宮) 参加者の集合写真

檜皮採取指導員としての 歩み

一人前の原皮師を 育てるために



指導員 大野 浩二

原皮師養成研修事業に携わって15年以上になりますが、指導員としての反省も踏まえて振り返ってみたいと思います。

初級研修生については一年一期の研修なので、近年では毎年研修生がいるわけではありません。中級研修生については、荒皮を採用した国有林などで2回目の採取ができるようになり、黒皮を採取する研修が主になりました。

査定会については毎年行っており、上級者の割合がかなり上がってきました。査定会だけでなく普段の研修中も色々と厳しい査定基準を設け、スピードを含めた技術水準の底上げに取り組んだこともあり、また、屋根葺師と兼業でされている方が屋根葺師に専念するようになる方もおられ、研修生の人数としては少し減少しました。ただ、一人一人の技術は向上してきましたので、採取量は増えてきています。年齢も20代から50代とそれぞれの世代で上級者が育ち、指導の補助員や研修中のリーダーとして活躍してくれるようになってきました。

定着率という点では、初級生については残念ながら少し低いように思います。高所の作業では危険な事もあり、かなり厳しく指導し過ぎたのかと反省するところもあります。保存会として高い技術を持った職人を育て、上質の檜皮を安定的に生産できるようにすることが目的ですので、一人一人に合わせた指導と、できるだけ自分の技術も見せながら保存継承に取り組んでいきたいと思っています。

長年に渡り原皮師養成研修ができてきているのは、全国の国有林約400ヘクタールに及ぶ檜山を研修のフィールドとして提供していただいていることが大変大きいと感じています。養成研修を年間計画する際に、民有林だけでは情報や面積が限られますので、国有林を中心に計画できることは本当に有り難いことだと感謝しております。

今後も原皮師の技術を保存継承していくために、国有林をはじめ、山林所有者の皆様には変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

20年余りの成果に 研修の価値を感じて



指導員 須賀 均

私が檜皮採取指導者に任命されて20年余り、振り返るとあっという間ですが、思い出すと色々なことがありました。

当初は、誰もがまだまだ技術の低い研修生の集まりです。慣れない技で荒皮を剥くので、まともな皮を採取するのは難儀でした。最初は振り縄で上ることよりも、ヘラ使いに慣れることを優先しました。少し慣れると振り縄を使っただけの作業です。初級・中級生と一緒に同じ檜山に入ることもあったので、皆が振り縄で上りだすと、指導者としてはヒヤヒヤものでした。

数年するうちに初級研修の効果もあり、技術的に認められる人材が増えてきました。研修生皆に真剣に取り組んでもらえたおかげで、指導できる人材も徐々に増えてきました。そして、採取研修を始めて10年が過ぎる頃には納得のいく技術者が増えてきました。今は、皆一丸となって努力した研修の価値を感じています。なかには、なぜ採取研修に入構したのかと疑問を持ちたくなるような人材もいましたが、皆それぞれに頑張ってくれました。今となっては良い思い出です。

また、最初の頃は研修用の檜皮の調査に苦労しました。この人数で何日、何kg採取できるのかの目安も難しかったのです。しかし、この20年余りの歳月により、貴重な人材が多数育ちました。しっかりと採取作業ができる人材が増えたことは喜びです。

今後、私は、ただ量を取るだけでなく、巾、長さを十分に考えた採取で、丸皮を持ち帰っても無駄のない使い易い皮を剥くことを考え、より高いレベルの研修指導ができるように努力したいと考えています。

檜皮採取者(原皮師)養成研修 事業風景

■檜皮採取者(原皮師)養成研修 事業内容

檜皮採取技術の習得(原皮師の養成)を目的とする。初級、中級、上級と3つのコースを展開。中部森林管理局、近畿中国森林管理局管内の国有林を主として研修事業を実施。また、民有林等へも研修場所を拡大し、九州から関東地方まで研修場所は広範囲にわたる。

年1回の査定会を実施。技術レベルの考課測定を行う。初級研修については1年で修了。その後、中級者として研修事業に参加する。



平成18年度/檜皮採取者(原皮師)初級研修(福井県・中川辰男民有林)



平成25年度/檜皮採取者(原皮師)初級研修(福井県・大瀧神社)

檜皮採取者(原皮師)初級研修は、座学として森林安全衛生法などを学習し、実技では国有林や民有林に入山し、指導員や指導補助員が指導にあたり10クールの研修を行います。



平成14年度／檜皮採取者（原皮師）初級研修（山口県・城山国有林） 須賀指導員



平成15年度／檜皮採取者（原皮師）中級研修（山口県・城山国有林）



平成30年度／見学会(福岡県・九州大学演習林)

見学会は、入山している国有林、市有林、民有林にて行います。参加者は、森林関係者だけではなく、一般の方、小学校、大学からからも依頼があります。



平成30年度／査定会(岡山県・両山寺)

査定会は、年に一度行います。檜皮採取林にて2日間で実施し、指定された選定木を採取し、荷造りまでを行います。指導員、指導補助員が、査定します。査定会の評価と年間考課値から技術ランクを決定し、次年度の研修に参加してもらいます。



平成21年度／指導員会議（京都市・文化財建造物保存技術研修センター）



平成30年度／檜皮採取全体会議（京都市・文化財建造物保存技術研修センター）

檜皮採取全体会議は、その年の入山予定者を対象に行なっています。檜皮採取のマニュアルを読み込み、リーダーを中心に各入山予定林の確認を行います。

国有林檜皮採取山の紹介

■檜皮採取者（原皮師）養成研修事業 採取地一覧

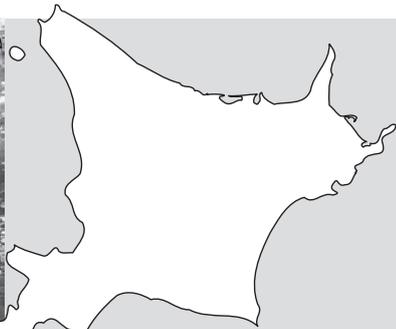
No.	採取地	所有者	住所	採取期間
①	賤母・南蘭国有林	中部森林管理局	長野県木曾郡南木曾町	平成13年～
②	城山国有林	近畿中国森林管理局	山口県岩国市	平成14年～
③	野呂山国有林	近畿中国森林管理局	広島県呉市	平成14年～
④	野山国有林	近畿中国森林管理局	奈良県生駒市	平成14年～
⑤	鞍馬山国有林	近畿中国森林管理局	京都府京都市左京区	平成14年～
⑥	別所国有林	近畿中国森林管理局	滋賀県大津市	平成14年～
⑦	彦山国有林	近畿中国森林管理局	広島県福山市	平成15年～
⑧	臥牛山国有林	近畿中国森林管理局	岡山県高梁市	平成15年～
⑨	鶏籠山国有林	近畿中国森林管理局	兵庫県龍野市	平成15年～
⑩	大日山・南禅寺国有林	近畿中国森林管理局	京都府京都市左京区	平成15年～
⑪	坂ノ谷国有林	近畿中国森林管理局	兵庫県宍粟市	平成16年～
⑫	高野山国有林	近畿中国森林管理局	和歌山県伊都郡高野町	平成16年～
⑬	黒木国有林	近畿中国森林管理局	岡山県津山市	平成16年～
⑭	那岐山国有林	近畿中国森林管理局	岡山県勝田郡奈義町	平成16年～
⑮	笹ヶ丸国有林	近畿中国森林管理局	広島県広島市	平成16年～
⑯	宮島国有林	近畿中国森林管理局	広島県廿日市市宮島町	平成16年～
⑰	地獄谷国有林	近畿中国森林管理局	奈良県奈良市	平成17年～
⑱	三上山国有林	近畿中国森林管理局	滋賀県野洲町	平成18年～
⑲	大又国有林	近畿中国森林管理局	三重県熊野市	平成19年～
⑳	妙法山国有林	近畿中国森林管理局	和歌山県那智勝浦町	平成19年～
㉑	甲山国有林	近畿中国森林管理局	兵庫県姫路市	平成20年～
㉒	西通山・増位山国有林	近畿中国森林管理局	兵庫県姫路市	平成21年～
㉓	仏通寺国有林	近畿中国森林管理局	広島県三原市	平成21年～
㉔	権現山国有林	近畿中国森林管理局	和歌山県新宮市	平成23年～



平成28年度／査定会（長野県・賤母国有林）



平成28年度 / 査定会 (長野県・賤母国有林)



■ 国有林採取地分布図



平成26年度 / 檜皮採取者 (原皮師) 初級研修 (福井県・大瀧神社)

令和2年度 茅葺中級研修

今年度の茅葺中級研修は、11月25日より大阪府吹田市にある日本民家集落博物館内の「奄美大島の高倉・逆葺」葺き替えを行いました。研修では当保存会 隅田 隆藏正会員と長野 直人準会員が指導員にあたり、また、奄美より中村 博志氏に外部指導員として来ていただきました。

研修生はいずれも京都からの参加ですが、希少な逆葺の工法について、本土のやり方と奄美でのやり方を同時に学ぶことができ、大変有意義な研修となり、また奄美の中村氏との交流を持てたことは非常に有益でありました。

茅刈り研修は昨年同様、静岡県伊東市の大室山での研



修を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を受け、残念ながら実施することができませんでした。

本年度はすべての研修がコロナ禍での活動となり、様々な配慮が必要となりましたが、そんな中でも逆葺研修が行えましたこと、行政の方々、先生方、各関係者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

貴重な経験の場を後進に繋げたい

指導員 長野 直人

この度の「奄美大島の高倉」研修について、指導員に抜擢されたとき、「ついに念願がかなう時が来た。」と高揚感を覚えた。なぜなら、「奄美大島の高倉」の茅葺工法は「逆葺」であるからだ。私自身、今まで逆葺の屋根を葺いた経験が無く、写真や聞いた話の中だけでしか逆葺を捉えることができなかった。しかし、この研修でチャンスを得ることができたのは大きな喜びとなったのだ。

研修序盤は隅田氏の指導を主とし、中盤以降は中村氏の指導を主として研修生と共に逆葺を実践したのだが、隅田氏は短い稲藁を用いた逆葺がベースの手法で、中村氏はそれより長いススキやチガヤを用いた逆葺がベースである違いが非常に興味深かった。特に屋根に対する体の立ち位置や役割分担などは、本場の中村氏の手法は大変理にかなっており、耐久性を補う施工の合理化がとても洗練されていると大変感心させられた。

逆葺は真葺と違い、納めた茅がそのまま仕上げとなるため、後の修正がききにくい。研修生は、屋根勾配に見合った納まりにするのに大変苦労したと思う。このあたりは簡素な工法と言われる逆葺においても大変難しく、経験がモノをいうところであった。

逆葺の工法を採用できる物件は、今日の日本において極めて少ない。私個人的な意見として、今後も日本民家集落博物館と屋根保存会が協力して、この「奄美大島の高倉」が後進に逆葺を経験させる貴重な場として存在し続けることを願っている。

最後にこのような貴重な経験を与えてくださった日本民家集落博物館の関係者の皆様、屋根保存会の会長・理

事の皆様、隅田・中村両氏に感謝の意を表し、この経験を後進に伝える責務を果たしたく思っている。

指導できたことが、良い経験に

指導員 中村 博志

今回、奄美から「奄美大島の高倉・逆葺」の技術指導員として参加させていただいた中村です。

最初は私のような者が、技術指導ができるか不安で、辞退しようかと考えましたが、本土の茅葺にも興味があり、いい経験になればと参加させていただきました。今まで本土の茅の葺き方を全然知らず、逆葺という言葉さえも分かりませんでした。話を聞いて奄美の葺き方と全然違うんだなと思いました。

こちらの指導員の方々も、奄美の葺き方を知らないとのことでしたので実演しましたところ、初めて見る葺き方にびっくりされていました。奄美で実際に使っている材料があれば、もっと詳しく説明できたかと思います。

研修生も最初はとまどいながらやっていたのですが、徐々にうまく葺けるようになっていきました。本当は棟の取り付け方も一緒にやりたかったのですが、3日間という短い期間でしたので、やれずに残念です。他の指導員の方に、棟の取り付け方を説明し研修を終了しました。少しでも役に立てたなら良かったと思います。

最終日にフォーラムにまで参加させていただき、安藤先生の貴重なお話を聞くことができ、いい経験をさせていただきました。ありがとうございました。

これからも奄美で高倉の茅葺の仕事をやりながら、技術の伝承をしていけたらなと思っています。

今後に生かし、腕を磨く

研修生 立脇 裕也

普段とは違う茅の向き、葺き方ということで、今まで経験したことのない未知の世界でした。

いつも下から見て、茅の勾配を確認し叩いて調整するところも、上から見下ろす感じで茅の勾配を決めるというのが新鮮でした。しかし、真葺は先程も書いたように屋根面を叩いて調整しますが、逆葺は穂先が外側になっているため叩けないので、一発で決めないといけないということに慣れるまで時間が掛かりました。

逆葺は、屋根作業をする人、押し茅を固定する人、茅を渡す人、針を屋根裏から刺す人と役割が分担されています。そのおかげで屋根作業の人はそこに集中して作業ができ、また逆葺の特徴の螺旋状に葺いていくというのも相まって非常にスピーディーに進んでいきます。材料さえ揃っていれば、わずか10日程で全ての工程が済むそうです。慣れてしまえば本当にそのくらいできてしまうなど逆葺ならではの役割分担の効率の良さには驚かされました。

また、針受けの際は屋根裏の人が「針」という掛け声で針を出し、屋根にいる人がそこに縄を通し、「トゥー」という掛け声で針を戻してもらい縄を固定するという、これも真葺とは逆の手法を取っていました。屋根裏からは押し茅の位置が分かりづらく、一度針を刺してみないと判断できないので、これも慣れるまで時間が掛かりました。しかし、垂木の間隔の狭い屋根なので、屋根裏から針を刺す方が作業がしやすく、融通も効きやすかったので連携も取りやすかったです。

真葺に比べ厚く葺いてはいけなく、耐用年数が10年と短いです。作業日程は真葺の半分、もしくはそれ以下です。それを生かして何か新しいことにチャレンジできないか考えられるいい機会にもなりました。今回学んだことを今後に生かしていけるよう職人としての腕を磨いていきます。



違いだけでなく、作り手の想いも学ぶ

研修生 小野 晃穂

今回の研修ではとても貴重な経験を積むことができました。特に、各地域で施工が違うのは棟の取り付けなどが主だと考えていましたが、平葺も施工方法が違っていました。

とても理にかなっていましたが、普段と動きが異なるとスムーズに作業ができませんでした。このような状況で指導員の方はしっかりサポートしてくださり、工程が遅れることのない様にご指導してくださいました。素晴らしい指導員にも認められる様に、日々精進していく次第です。

また、各部位の名称や針を通す掛け声なども学び、奄美の風景をイメージしながら研修に臨めました。建築する上で作り手の想いがある良い建物ができることを改めて感じました。

社に戻り、今回学んだことを生かして今後も仕事に取り組んでまいります。



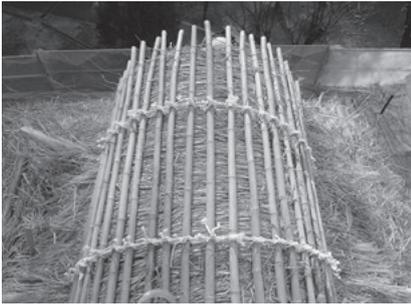


「奄美大島の高倉」
逆 葺



▲葺き替え前

▼葺き替え後



令和2年度 茅葺きフォーラム 開催

期 日 ● 令和2年12月10日(木)
会 場 ● 日本民家集落博物館(服部緑地公園内)
日向椎葉の民家
(大阪府豊中市服部緑地1-2)

令和2年度中級技術研修の期間中に、現場見学及び協議会を開催いたしました。今回「奄美大島の高倉」の葺き替えという、現在日本ではとても数少ない逆葺の工法による研修となりました。選定保存技術保持者の隅田隆藏氏と、長野直人氏の指導及び、奄美より数日中村博志氏に来ていただき、現地での屋根の葺き方を教わる機会に恵まれ、貴重な経験と知識を頂きました。

協議会では、コロナ禍での開催ということで、限定した規模での開催となりましたが、文化庁はじめ筑波大学名誉教授 安藤邦廣氏、大阪府文化財センター 山城 統氏にお話をいただき、短い時間ではありましたが、活発に議論できたと思います。

元々は逆葺であった屋根を前回工事時に耐久性を重視し、真葺にしたものを、今回また逆葺に戻すということで、様々な議論や手続きがあり、皆で考える機会となりました。長年博物館に勤務しておられた山城氏においては、逆葺に戻せることに感慨もひとしおとの感謝の言葉をいただきました。また研修現場においては奄美の中村氏という現地の職人さんに来ていただき、交流を持てたことは非常に有意義でありました。

職人たるもの実際に見たなら、再現できるスキルを持たなければならない。しかし見たこともない考察だけで地方性に近づくことは難しい。その意味で、今回その地方の職人を招いて指導やお話を聞かせていただけたことは、最大の収穫であったのではないのでしょうか。

希少な屋根の葺き方は、最も伝承の危機にあると言えます。その技術を皆で少しでも共有できたこと大変嬉しく思います。

本年は例年にないコロナ禍での開催にあたり、調整にご尽力いただいた関係者皆様に心より感謝申し上げます。

見学会 「日本民家集落博物館内 奄美大島の高倉」

現場説明 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 正会員 隅田 隆藏 準会員 長野 直人

協議会 「日本民家集落博物館内 日向椎葉の民家」

開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 会長 大野 浩二

来賓挨拶 ● 日本民家集落博物館 館長 井藤 徹

博物館解説 ● 公益財団法人大阪府文化財センター 山城 統

講演 ● 筑波大学 名誉教授・一般社団法人 日本茅葺き文化協会 代表理事 安藤 邦廣
題目「南西諸島の逆葺き その系譜と技術的特徴」

討論会 ● 議題「希少な素材、葺き方の屋根について」

総評 ● 文化庁 文化財調査官 結城 啓司

閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会 副会長 宮川 義史

見学会



葺き替え前



葺き替え後「奄美大島の高倉」

協議会



来賓挨拶 井藤 徹様



博物館解説 山城 統様



講演 安藤 邦廣様



討論会風景



総評 結城 啓司様

「伝統建築工匠の技」

ユネスコ無形文化遺産の登録を受けて

平素は、当保存会の事業活動にご協力いただき誠にありがとうございます。

昨年末に当会の選定保存技術である、檜皮葺・柿葺、茅葺、檜皮採取、屋根板製作を含む17の木造建造物を受け継ぐための伝統技術「伝統建築工匠の技」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。登録にあたっては、文化庁はじめ関係者の皆様のご尽力と会員皆様方のお力添えがあつてのことと心より感謝申し上げます。

登録されましたことは大変喜ばしいことではありますが、今後もより真摯に伝統技術の保存継承に取り組み、充実した養成研修を確立し、高い技術と精神性を持った職人を育てていく所存です。また、関係者だけでなく日本の皆様が誇れる伝統文化として認識していただけるように様々な事業に取り組み、世界に向けても日本の伝統技術として広めていけるように皆様と共に取り組んで参りたいと思っておりますので、より一層のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

会長 大野 浩二



発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
<http://www.shajiyane-japan.org>

古文化 第125号

令和3年3月31日発行

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

あとがき

2011年の東日本大震災から10年となった3月11日、全国各地で追悼行事が開かれ、多くの人々が犠牲者の鎮魂と被災地の復興を願いました。10年経った今なお、4万人以上が全国各地で避難生活を強いられています。今後、いつ、どこで、このような震災が起こるかわかりません。この経験を生かし、震災の教訓を生かし、必要な対策を取り、大切な命を落とす人や大切な人を失い悲しむ人を一人でも減らしてほしいと思います。

■ ふ る さ と 探 訪 ■

池田 民哉さんの古里

「金印から豚骨ラーメンまで」

(福岡県福岡市)

どこの県にもお国自慢はあるものの、福岡県ほど「全国誰もが知っている」といえる有名物件が揃っている地域は珍しい。

ごく身近な食べ物にしても豚骨ラーメンや辛子明太子は日本の隅々まで浸透している。郷土料理の代表としてアラ鍋、水炊きが有名だが、少し前まで福岡だけで食べられていたモツ鍋や鍋餃子、焼きカレーが、今では全国津々浦々の居酒屋メニューに掲載されている。

銘菓ひよこやヤクルト、チロルチョコさらに「とよのか」「あまおう」といった品種のイチゴは、福岡生まれの食品と知らないまま誰もが一度は口にしているだろう。

福岡発祥の有名企業もまた多い。ソフトバンクや日本製鉄(新日鉄)はもちろん日産自動車、ブリヂストン、出光興産、日立金属などなど…。

歴史上の都である京都や東京から遠く離れた福岡が、かくも独自の発展を遂げたのはなぜか。ここはヤマトの中で最

も大陸に近く、超古代から最新の文明が伝わってくる土地柄であったことが大きな要因だろう。

その証左が、かの金印である。「漢委奴国王」と彫り込まれた金印は、どの歴史の教科書でも冒頭に写真入りで紹介されていて、知らぬ者はいない。印面の一辺2.3cmと指先でつまめるほどの大きさながら国宝に認定されている。

現物は福岡市博物館のガラスケースに鎮座していて、重さ108gの小金塊を保管・展示するために巨大な博物館が建てられたといっても過言ではない。しかも写真撮影自由! 実物を見ようと年間十数万人がカメラを手にガラスケース前列をなし、来訪記念に実物と同じ大きさのレプリカ(金メッキで税込み4,070円)を買い求めて帰る。

金印が渡来したのは近畿地方に巨大古墳が築かれる2百年ほど前のこと。ヤマト王朝に先駆け、日本最初期の王国がこの地に存在していたことを、福岡県民は何より誇らしく思っていることだろう。



(文・イラスト 米林 真)

古文化

第 125 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会